

Title	ジョン・ スチュアート・ ミルの富の定義
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.8 (1937. 8) ,p.1139(39)- 1170(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19370801-0039
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370801-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幕末における代表的經濟論者佐藤信淵

三八 (一一三八)

(50) 『通説秘録』「資料」七二〇—二頁。

(51) 同上(「資料」七二二頁)。

(昭和十二年七月二十三日稿)

ジョン・スチュアート・ミルの富の定義

高橋 誠 一郎

富の創造及び使用は普く自然法によつて支配せられる、而して是れ等のものが發見せられ叙述せられた時、それは經濟科學を構成する。洵に經濟學は「富の科學」と稱せられて來た。然も、經濟學者等は彼れ等の科學の基礎たる富なる語の意味に關して未だ會つて完全に一致を見ることがなかつた。最廣義に解釋する者は、是れを以つて、苟も吾人の欲望を満足する一切の物を總稱するものと做し、更らに狹義に之れを解する者は、或ひは物質性を主張し、或ひは交換價値を有せざる可らずと做し、或ひは可讓渡性を固執し、或ひは數量の有限を必要とし、或ひは比較的永續性を有し、蓄積可能なるを必要條件とし、或ひは勞働の産物のみに之れを限定せんとする等區々にして一致する所がない。

一千八百四十八年、ジョン・スチュアート・ミルが其の大著『經濟原論』(Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy.)を公にせる時、彼れの友人及び無批判的なる一般社會は絶大なる稱

ジョン・スチュアート・ミルの富の定義

三九 (一一三九)

讚を以つて之れを迎へ、經濟學は是れに由つて最高の完成状態(*ne plus ultra*)に到達せしめられたるものと想像せられ、而して數年の間、ミルを批判するは恰も「絶對確實」其の者を批判すると等しく無益の業であると看做され、苟も彼れの主張する所のものは總べて神聖不可侵のものとして承認せられんとするの概があつた。而して彼れが富に與へた定義は實に過去半世紀に互れる幾多經濟學者等の討究の歸結を篩ひ分けたる成果であつて、「富とは何ぞ」と云へる問題に對して解答を與へんとする者は須らくミルの語を以つてす可きものと思惟せらるゝの觀があつた。然しながら、此の經濟學界最高の權威によつて與へられたる富の定義すら、聽がて辛辣なる批評に遭遇しなければならなかつた。社會發達の一定階段に於いて、人々が現實に欲求するものよりも、寧ろ欲求す可きものを念頭に置けるジョン・ラスキンは彼れが一千八百六十年 *Cornhill Magazine* の八、九、十及び十二月號、並びに *Harper's New Magazine* の九、十、十一及び十二月號に掲載し、一千八百六十二年に單行本として出版せる *Unto this Last*: Four Essays on the first Principles of Political Economy. の同年五月十日附序文、並びに一千八百六十二年より三年に亘つて *Fraser's Magazine* に掲載せられ、一千八百七十二年に一卷に取り纏めて出版せられたる *Munera Pulveris*. Six Essays on the Elements of Political Economy. の一千八百七十一年十一月二十五日附序文に於いて痛烈に之れを批評した。(The Works of John Ruskin, ed. by E. T. Cook and Alexander Wedderburn, vol. xvii, 1905, p. 18 ff.; p. 131 ff.)。更らに、購買力が富の眞の軌準を形成すると考へたエーチ・デイ・マクラウドは其の *The Principles of Economical Philosophy*. に於いて、ミルは其の『原論』の最初の六十頁中に於いて三個或ひ

は四個の相矛盾する意味を導入し、若しくは少くとも包含せしめたることを指摘した。(ibid., 2nd ed., vol. ii, 1872, pp. 85-86; vol. ii, 1875, pp. 104-105; cf. The History of Economics, 1896, pp. 125-127.)。吾人は以下、聊か彼れの富の定義が之れに關する如何なる論争の後に公にせられ、又後年の學說に對して如何なる示唆を與へたるかを觀んとする。

二

ミルは其の『原論』序説(Preliminary Remarks)に於いて、經濟學の對象たる富の概念の發達を略述する。而してミルは猶ほ、重商主義の行はれたる間は、諸國民の全政策に於いて、或ひは陽に或ひは陰に、富は單に貨幣、若しくは豫め貨幣の状態に於いて存せざる時は、直ちに之れに改變せられ得る貴金屬より成るものと推定せられたりと做す淺薄皮相の解釋を下して居つた。(ibid., 1st ed., 1848, p. 23.)。而して彼れ自身は富を以つて交換價値を有する總べての有用若しくは快適なる物件、即ち換言すれば、勞働若しくは犠牲なくして、所要の數量に於いて取得せられ得るものを除き、總べての有用若しくは快適なる物件と定義せらるゝを得可きものと説いてゐる。(ibid., pp. 10-11.)。

彼れは固より彼れ以前に闢はされたる富に關する論争を熟知しながら、其の裡に存する重要性を充分に把握することなく、比較的無造作に這般の定義を選定せるの觀がある。

彼れの父ジェームズ・ミルは其の『商業擁護論』に於いて、富は價值なる名辭に關係するが故に、先づ後者に意味

を附するの要ありと做し、價值は使用價值若しくは交換價值の孰れかを意味すると説いて、例の如く、水と金剛石又は紅寶玉の例を引き、而して「富なる名辭は以下の頁に於いて、常に交換價值を有する客體を表示するものとして使用せらるゝか、若しくは少くとも他の意味に之れを使用する場合があつたとしたならば、注意を與ふ可き」旨を約定した。(Commerce Defended, 1808, p. 22.)。彼れは其の論敵ウィリアム・スペンスが國民的富に關して極めて曖昧且つ動搖不定なる總念を有し、場合に依つては是れを以つて、或る一定時に於いて其の國內に存する貨幣及び財貨の實際的蓄積より成るものと看做すの觀あるを難じて、斯くの如きは最も不完全にして謬妄なる概念であると説き、一國の富は或る一定時機に於いて其の存在を看出され得可き單なる物品の集合より成るに非ずして、其の國の年生産力に存するものと認めてゐた。曰く、「單に其の商人の倉庫中に存する財貨及び個人の家屋内に於ける設備の上のみ其の觀念を限定し、而して寧ろ吾人の勤勉の奇蹟的なる力によつて年々創造せらるゝ財貨及び設備の莫大なる高に其の注意を向くることのない者は大不列顛の富に關して甚しく不當なる觀念を有するものである」(Ibid., pp. 51-52.)。即ち是れに由つて觀れば、ジェームズ・ミルは必ずしも國富を以つて物質的持續的物件のみに限定せんとするアダム・スミスの極めて狹隘なる概念を踏襲せんとするものではなかつた。(此の點に關するスミスの所論に就いては昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷二二—三頁参照)。

佛のジャン・バチスト・セイは明かに、人間の勤勉によつて生産せらるゝ價值の總べてが、其の創造の後、言はず、物質と合體せられて、長短一定の期間保存せらるゝを得る種類のものゝみではなくして、高く評價せられ、高價

にして永續的なる産物に代へて購入せらるゝが故に實在性を有せざるを得ざるも、而も其れ自體何等の永續性をも有することなくして、其の生産の瞬間に滅却する或るものゝ存することを認めた。(Traité d'économie politique, sixième éd., 1841, p. 122.)。醫師・官吏・辯護士、若しくは判事の勤勉は彼れ等の労働なくんば、如何なる社會も存し得ざるほど肝要なる性質を有する諸欲望を満足する。然るに彼れ等の労働の收果は眞實ではないか。是れ等のものは之れと交換にスミスが富たることを承認する他の物質的産物を取得し、而して此の種の交換の反復によつて、非物質的産物の生産者は資産を取得するまでに眞實である。従つて、君主、長官、軍人、僧侶の業務は經濟學の研究範圍内に入り來るものに非すと主張するに於いてビエトロ・ヴェリイ伯は誤れるものである。(Meditazioni sulla Economia politica, §. 24.)。而してセイは、富が價值に比例するものであつて、之れを構成する價值の總額が大なれば大であり、價值が小なれば小であると觀た。(Traité, op. cit., p. 55.)。

爾後、セイは幾多の箇所において這般の學說を反復し、而して其の『實際經濟學講義大全』に於いて「爾來才能及び後天的的能力の如き非物質的財産が社會的富の必要部分を構成することが立證せられた」と説いてゐる。(Cours complet d'économie politique pratique; ouvrage destiné à mettre sous les yeux des hommes d'état, des propriétaires fonciers, et des capitalistes, des savants, des agriculteurs, des manufacturiers, des négociants, et en général de tous les citoyens, l'économie des sociétés, seconde éd., par Horace Say, 1840, p. 4.)。

斯くの如きセイの所論の英國經濟學者に對する影響はマカラックに於いて明かに看取することが出来る。

マルサスが其の『原論』中に於いて言ふが如く、アダム・スミスは那邊に於いても頗る正規的にして且つ形式的なる富の定義を與へてゐない。然しながら、彼れが此の名辭に附する意味が物質的物件に制限せらるゝことは、彼れの著作を通じて十分に明瞭である。而してマルサス自身は富を人類に必要、有用若しくは快適なる物質的物件に限定せんとした。而して彼れは斯くの如く限定せられた定義を以つて、吾人が富 (wealth or riches) に就いて云々する際に吾人の概念中に入り来るの常なる殆んど總べての物件を包含するものなることを信ぜんとしたのである。彼れを以つて觀れば、斯くの如きは吾人が是れ等の名辭を依然として普通の用途及び經濟學の語彙の兩者中に保留する限り顯著なる利益を有するものである。洵に富なる語を人間の受け得可き「あらゆる」利益若しくは満足に適用するは其の嚴正なる用法たるよりも寧ろ隱喩的なるものである。而して彼れは、富が人間幸福の唯一の源泉たることを斷定する提言の眞なるを承認せんとするものが殆んどなかつたのである。斯くて彼れ思へらく、經濟學に於いては、云々せらるゝ富が物質的物件に限定せらるゝと稱して妨げなきものであらうと。(是れ等の兩章句は一千八百三十六年の再版に於いては削除せられてゐる)。「是に於いて乎、一國は領土の廣袤と比較して是れ等物質的物件の供給せらるゝ多寡に従つて富裕若しくは貧窮と爲り、而して人民は人口と比較して是れ等のものゝ供給せらるゝ多寡に従つて富裕若しくは貧窮と爲るのである」。(Malthus, Principles of Political Economy considered with a view to their practical application, 1820, pp. 28-29; *ibid.*, 2nd ed., 1836, pp. 33-34)。

而も彼れは幾許ならずして生産的労働の問題が富の定義と緊密に關聯しつゝあることを認め、(*ibid.*, p. 29; 2nd ed., p. 34)、而して吾人にして若し富を有形的にして物質的なる物件に限定することがないならば、吾人は總べての労働を以つて其の程度に於いては相違するも、悉く生産的なりと稱するを得可きであると做してゐる。(*ibid.*, p. 38) 此の箇所は再版に於いては削除せられてゐる)。自然の恩恵に依つて一國のあらゆる住民に對し其の願望に對する最も十分なる割合に於いて生活の必需品、便益品及び娛樂品の總べてを備ふるならば、斯くの如き國家は交換價值を有す可き如何なる物をも領有することがなくとも、換言すれば、僅々一時間の労働を支配し得可き如何なる物をも領有することがなくとも、最高の程度に於いて富裕なるを得可きであらう。疑ひもなく、這般の事態に於いては、富は交換價值と何等の交渉がない。然しながら、斯くの如きは現實の事態ではなく、又如何なる將來の時期に於いても然る可き見込なきが故に、自然の恩恵は人間に彼れ自身の努力の助けなくしては殆んど何等の生活必需品、便益品及び娛樂品をも備ふることなきが故に、而して努力に對する大なる刺戟は惟り一定の労働若しくは犠牲に依つてのみ領有せられ得る所のものを領有せんとするの願望なるが故に、人間が地上に置かるゝ現實の狀態に於いては、富と交換價值とは依然として決して同一ではないが、是れ等のものは屢々想像せらるゝ所よりも遙かに密接なる關係を有するものであることが看出さる可きである。(*ibid.*, pp. 337-338; *cf.* 2nd ed., p. 299)。

相異なる事情の下に於いて同一の交換價值を有する同一貨物の相異なる數量を考察する際に、富と價值との間の區別は洵に完全に明瞭と爲るのである。而も此の場合に於いても増加せる數量の所有者は、單に消費者の見地よりして富裕の

程度大なるものであつて、交換の其れよりして然るものではない。然しながら、吾人が別種の物件を比較するに至る際には、其の所有者に與ふる富の程度を量定する方法は、其の相對的交換價值によつて表明せらるゝ是れ等のものゝ相互に保持せらるゝ相對的評價に依るの外なきものである。而も、富は價值の増加に比例して常に増加するものではない。何となれば、價值の増加は生活の必需品、便益品及び奢侈品が現實に減少せる場合にも往々にして生ずることあり得可きが故である。而も富は又富の稱呼に該當するものゝ單なる數量に比例して増加することもないのである。蓋し這般の數量が構成せらるゝ種々なる物品は、是れ等のものに其の適當なる價值を與へるうちに、其の社會の諸欲望及び諸力に比例せしめらるゝことがないかも知れぬが故である。(ibid., pp. 338-340; cf., 2nd ed., pp. 299-301.)。一國の富は一部分は其の勞働によつて取得せらるゝ産物の數量に依頼し、一部分は之れに對して價值を與ふるに適する底の現存人口の諸欲望及び諸力に對する其の順應に依頼するものである。然しながら、富と價值とが恐らく最も密接なる關係を有す可き所に在つては、後者は前者の生産に取つて絶えず必要なものである。現實の事態に於いては著しい努力に依るの外、富の著しい數量は取得せらるゝを得ない。而して或る物件が取得せらるゝ際に、個人若しくは社會が其の上に置く價值にして、之れを取得するが爲めに拂はれたる犠牲を十分に償ふに非ざれば、斯くの如き富は將來生産せらるゝことがないであらう。(ibid., pp. 340-341; 2nd ed., pp. 301-302.)。現實の事態に於いて、富の存在の唯一原因と稱せらるゝを得るは、明かに貨物の價值、若しくは人々が是れ等のものを取得するが爲めに行はんとしつゝある勞働及び其の他の物品の犠牲である。如何なる種類の富と雖も、

社會の一定部分が其の自然價格若しくは必要價格に等しき價值を其の上に置き、而して之れを取得するが爲めに這般の範圍まで犠牲を行ふの力と意志とを共に有するに非ざれば、持続的に市場に齎さるゝことを得ない。略言すれば、貨物の市場價格は財富生産上に於ける社會のあらゆる大移動の直接原因である。而して是れ等の市場價格は常に貨物が交換せらるゝ時と處とに於ける其の交換價值を明瞭に表示する。(ibid., pp. 341-342; cf., 2nd ed., pp. 302-303.)。

然しながら、マルサスは一千八百二十七年の小著『經濟學に於ける諸定義』に於いては「富」を定義して「領有し、若しくは生産するが爲めには、人間の努力の一定部分を要求したる人間に取つて必要、有用若しくは快適なる物質的物件なり」と做し、次いで「效用」を以つて「人類に奉仕し得るか、若しくは有益なる性質なり」と定義し、一件の效用は概して是れ等の奉仕及び利益の必要及び眞實の重要性に比例するものと看做されたりと説き、總べての富は必ず有用なるも、而も有用なる總べてのものは必ずしも富に非ずと論じてゐるが、(Definitions in Political Economy, 1827, p. 234.)。而も一物品は富たるが爲めには、「價值」を有せざる可らずとは説くことがなかつた。即ち彼れは「價值」が使用價值及び交換價值の二個の意味を有することを認め、使用價值を以つて「效用」と同義なりと看做してゐるが、是れを以つて經濟學中に現るゝこと極めて稀有であつて、單に價值なる語のみを使用する時は、決して是れに由つて使用價值を意味することなきものと認めたのである。即ち彼れの所謂價值は交換價值であつて、そは物質的物件に限定せらるゝことなくして、稀少性及び生産の難易に依存すること遙かに大なるの點に於いて富

と區別せらるゝものと觀たのである。(Ibid., p. 234, 235)。而して彼れは其の『原論』に註記して、彼れは前述の如く「諸定義」中に於いて富を定義したのであるが、「領有し、若しくは生産するか爲めには、人間の努力の一定部分を要求したる」云々と附言せるは、空氣、光線、雨等を除外するが爲めであつたが、而も勤勉若しくは勞働なる名辭を定義中に導入することには幾分の異論あるを認めた。何となれば、何等の勞働も其の上に使用せらるゝことのなかつた物件が富と看做さるゝことあり得可きが故である。(Principles, 2nd ed., pp. 333, 4, 5)。
リカードも亦價値を以つて本質的に富と相違せるものと做してゐる。蓋し價値は豊富に依頼するに非ずして、生産の難易に基くが故である。(Ricardo, Principles, 1817, p. 377)。

四

然るにリカード經濟學の普及者マカラックは其の「千八百二十三年の『大英百科全書』第四版の補遺に於ける「經濟學」の一項に於いて「若し富によつて交換價値を有し、且つ人間に取つて必要、有用若しくは快適なる物質的産物を意味するとしたならば」、經濟學は富を取扱ふものであると論じてゐるが、之れを基礎として執筆せられた一千八百二十五年の『經濟原論』に於いては、經濟學は屢々「富の生産、分配及び消費を取扱ふ科學」たる可く定義せられ、而して富によつて交換價値を有し、而して必要、有用若しくは快適の孰れかである物品若しくは産物を意味するとしたならば、此の定義は全然間然する所のないものであるが、而も吾人にして若し富なる名辭を更らに擴張せられ若しくは狹縮せられたる意味に解釋するとしたならば、そは非難せらる可きものであると觀た。例へば、

マルサスは富を以つて「人間に取つて必要、有用及び快適なる物質的物件」と同一たる可きものと想像した。而して吾人が恐らく物質的物件なる限定的成語の導入に對して正しく提出せられ得可きあらゆる異議を撤回す可しとしても、尙ほ此の定義は本質的に缺陷あることが明かである。マカラックは是れを立證するが爲めには、景圍氣及び太陽の熱は物質的であると共に必要、有用且つ快適なる産物ではあるが、其の獨立の存在と之れを特に領有すること能はざることゝは是れ等のものより交換價値を剝奪するによつて之れを斯學の攻究から除外することを述ぶるを以つて足れりと思惟したのである。(M. Culloch, Principles of Political Economy, 1825, p. 5)。

而して彼れの同儕ジェームズ・ミルは前述の如く必ずしも國富に關するスミスの見解と一致することのないものであつたが、而も「農業上の馬匹及び雇人は其の消費せる穀物の分量の二倍若しくは三倍を生産するであらう。犬、遊興用の馬、及び定服の下僕は何物をも生産することがない」と説いて、此の點に於いてはスミスの意見を承認して居つた。(Commerce Defended, op. cit., p. 69)。然るにマカラックは、製造人の勞働は賣り得可き貨物に體現せらるゝが故に生産的であるに反し、僕婢の勞働は爾く體現せられざるが故に不生産的であると做すスミスの所論を反駁した。彼れ曰く、「而も製造人の勞働は眞に如何なるものを生産するか。そは専ら社會の便利及び便益の爲めに要求せらるゝ快樂品及び便宜品より成るのではあるまいか。製造人は物質の生産者ではなくして、單に效用の其れである。而して僕婢の勞働も亦效用を生産することが明かではあるまいか。穀物、牛肉、及び其の他の食料品を産出する農夫の勞働が生産的であることは遍く承認せらるゝ所である。然しながら、果して然らば、是れ等の物品を調

理し、煮焼し、而して是れ等のものをして使用せらるゝに適せしむる必要且つ缺く可らざる任務を遂行する僕婢の労働は何故に不生産的と看做さる可きであるか」云々と。(McCulloch, Principles, p. 406.)

シイニイオアも亦、是れ迄、生産物は物質的及び非物質的、若しくは同一の區別を他の言葉に現せば、貨物と勤務とに分たれたと做し、而して生産的及び不生産的労働者若しくは物質的及び非物質的生産物の生産者若しくは貨物と勤務との間に劃されんとした區別は考察せらるゝ物件たる諸物其の者に存するに非ずして、是れ等のものが吾人の注意を惹く様式に存する差違に基くの觀あるものであると説いた。彼れを以つて觀れば、吾人の注意が主として變更を惹起する行爲に對するに非ずして、這般の行爲の結果に對し、變更せらるゝ物に對して喚起せらるゝ場合には、經濟學者は這般の變更を惹起せる人を生産的労働者、若しくは貨物又は物質的産物の生産者と名附けた。他方に於いて、吾人の注意が主として變更せらるゝ物に對するに非ずして、這般の變更を惹起する行爲に對して喚起せらるゝ場合には、經濟學者は這般の變更を惹起せる人を不生産的労働者、彼れの努力を勤務又は非物質的産物と名附けたのである。(Senior, Political Economy, 3rd ed., 1854, p. 51.)

而して彼れは經濟學を以つて富の本質、生産及び分配を論ずる科學なりと做し、富を以つて實買若しくは貸借し得るものであり、又價值を有するものと觀、而して價值を以つて或る物に在つて之れをして交換受授せらるゝに適せしむる性質なりと説いた。(前掲『經濟學史』上卷五一六―七頁參照)。然しながら、彼れは斯くの如き富の定義を以つてホウエートリ大僧正を除くの外、如何なる經濟學者によつて採用せられたるものとも正確に一致すること

なきものと信じた。(ibid., p. 22.)

即ちリチャード・ホウエートリ(Richard Whately)は其の一千八百三十一年の『經濟學序講』に於いて、富なる名辭を以つて經濟學上に於いては交換せられ得る貨物に限定せらるゝものと做し、而して斯學は是れ等のものが交換の目的物たり、又は交換の目的物たる可く企圖せらるゝ限りに於いてのみ之れを取扱ふものと觀た。即ち彼れに従へば、經濟學は國民的富の科學たるよりも寧ろ交換の科學として叙せらる可きものであり、經濟學は寧ろ「交易學」(Catactics)と稱せらる可きである。蓋し斯學の取扱ふ物件其の者は、吾人が是れ等のものを交換の目的物たらしむるの可能性若しくは意志を除去するとしたならば、是れに由つて、是れ等のものをして富の追求せらるゝ究竟目的たる幸福に對して最高度に於いて養せしむるを得るとしても、直ちに其の領域よりして排除せらるゝが爲めである。(Introductory Lectures on Political Economy, delivered in Easter Term, MDCCXXXI, 2nd ed., 1832, pp. 6, 7.)

彼れに従へば、アレクザンダー・セルクレグ(Alex. Selkirk)即ち其の冒険がロビンソン・クルソー物語を暗示せりと想像せらるゝ人物の如き無人島に於ける人は、食料、衣服及び諸般の娛樂品を支給せらるゝことが豊富であるとしたならば、彼れは形容的に富裕と稱せらるゝを得可きものであり、又、新たなる移民が到着するや否や、直ちに交換し得可きものと爲り、而して彼れをして、嚴格に言つて、富裕ならしむ可き幾多の貨物を有し得可きであるが、而も經濟學が注意することのない地位に在るものである。同様に音樂的才能の行使を交換の目的物たらし

むる職業的演奏家を取つては富である這般の才能は、斯くの如く之れを使用するは墮落たるを免れざる上流社會の人に取つては富ではないのである。是に於いて乎、そは此の最後の場合に於いては、享樂の泉源ではあるが、經濟學の領域外に存するのである。(Ibid., pp. 7-8.)

斯くの如く富なる名辭を、交換せらるゝものと認めらるゝ諸物に限定するは、同一物をして或る人に對しては富たらしむるも、他に對しては富たらしめざるを理由として反對を受けた。這般の事情其の者は又、ホウエートリに取つては、常に、斯くの如き名辭の使用を推奨する主たる理由として映じたのである。蓋し、同一物は別箇の人に對しては別箇のものなるが故である。縱令ひ、吾人が所有物のあらゆる種類に關して「富」及び「價值」なる名辭を使用することゝするとしても猶ほ、吾人は、例へば、賣るが爲めに庭木を培養する養樹園主による庭木の蒐集の所有と、自己の庭園を飾るが爲めに是れ等のものを植附けた紳士による其れとの間には、少くとも或る甚だ大なる相違の存することを承認しなければならぬ。然しながら、「富」なる名辭の通俗の用法は常に甚だしく精確ならざるものであり、而して先づ最初に、事情に従つて、全然同一なる物を、或ひは富の物件として、或ひは然らざるものとして考察するに由つて混亂せしめらるゝを避くるが爲めに、或る程度の注意を要す可きが故に、彼れは這般の理由に據つて、普く且つ専ら交換に關するものとして經濟學を叙述するを以つて大體に於いて一層便宜であると思惟するのである。(Ibid., pp. 8-9.)

五

之れに反し、トールレンズ大佐は、現時に於いても猶ほ政治哲學者は富を價值と混同するの誤謬に陥るものと做し、富は價值に在るものに非ざることを論證せんとした。(An Essay on the Production of Wealth, 1821, p. 7.)。彼れに従へば、或る物を他の物に對して與へんとするの意志及び能力に依存する交換價值は、吾人の欲望を充足し、吾人の願望を満足する物品に關して、時に存することを看出され、時に看出さるゝことなき偶發事、偶然の事情である。富を以つて交換價值に存すると定義するは、是れを以つて、物質的主體に屬しつゝある何等かの性質若しくは形態に存せずして、精神的動作者の動機及び決意に存すると定義すると同である。吾人は是れを以つて交換價值を有しつゝある物品、若しくは更らに正確に言へば、人々が交換することを得、又交換せんとしつゝある物品に存すると定義する時は、吾人は這般の不合理を免るゝも、而も斯くの如き場合には吾人は同一の性質を有し、又同一の用途に充てらるゝに拘らず、時に富を組成し、時に組成せざるものとして同一物を表示する矛盾に自己を陥るゝものである。(Ibid., pp. 11-12.)。自餘の人類との總べての交際を遮斷せられて、土地を耕作し、其の産物を調製して使用する單一の家族、並びに如何に廣大にして、又如何に人口多しとするも、分勞確立せず、各人は彼れ自身多様の仕事を兼ね行ひ、而して其の家族の爲めに其の消費する物品の總べてを獲得し調製する一國に於いては、物々交換及び販賣、従つて又交換價值は未知なる可きである。斯くて、富が交換價值に存するとしたならば、斯くの如き孤立的家族及び國民は單一なる富の物品をも領有することがないであらう。更らに又、對內的に財貨の共有を行ひ、而して對外貿易を有することなき一社會は、國內に於ける分勞の總べての利益を利用し、而して生活上の必

要品、快楽品及び奢侈品を夥しく豊富に供給せらるゝことあるも、而も其の獲得し蓄積せる有用なる貨物は何等の交換価値をも有するを得ざることが明瞭である。「ハーモニー」の名の下にベンシルヴェーニア准州に建設せられたる小共同團體の如き社會に於いては、富が交換価値に存するとしたならば、富の一物品も存することなかる可きである。(ibid., pp. 12-15.)

トールレンズの觀る所を以つてすれば、富は效用を有し而して有意的努力の一定部分によつて獲得せらるゝ物品より成る。分勞及び私有財産が確立せらるゝと共に、各個人は其の隣人の勤勉の餘剰産物に對して自己の餘剰産物を與ふるによつて生活し、而して富の諸物品は相互に交換せられ、交換価値の特性を取得する。而も交換価値は普通の語義に解せらるゝも猶ほ、富の至要の性質ではなくして、分勞及び私有財産の存在する特殊事情の下に於いてのみ推し之れに屬しつゝある偶有性である。分勞を廢止するか、若しくは財産の共有を確立せよ、然らば、孰れの場合に於いても交換価値は失はる可きである。加之、交換価値なる名辭は、一の貨物が他の貨物に對して與へらるゝ特殊事情の下に於いてすら、眞に富の物品に固定し若しくは附屬しつゝある何等の性質をも表示することなきを記憶せらる可きである。此の辭句は單に富の一物品を他のものに對して與ふるの願望と力が存することを含意するに過ぎない。(ibid., pp. 15-16.)

シイニョアは斯くの如きトールレンズの所論に對して、孤立的家族、又は各人が自己の生産物のみを消費す可き國民、若しくは財貨共有の存す可きものに在つては、經濟學の目的の爲めには、富は存することなかる可きである

と答へる。何となれば、事實、斯くの如き事態に於いては、(是れを以つて可能なりと想像して)、經濟の學は何等の適用をも有せざる可きが故である。斯くの如き社會状態に於いては農學、機械學若しくは吾人に在つては交換の主體たる貨物の生産に資するあらゆる他の技術は研究せらる可きも、而も經濟の學は存在することなかる可きである。(Senior, op. cit., p. 25.)

六

ジョン・スチュアート・ミルは斯くの如き論争の後に其の『經濟學の未決定問題』を上梓し、其の第三論文『生産的及び不生産的なる語に就いて』に於いて「或る者は富の名稱を、人類の便益若しくは享樂に資し、而して交換価値を有する總べての物に與へた。此の最後の條項は空氣、太陽の光線、及び勞働若しくは犠牲なくして無制限なる分量に於いて取得せられ得るあらゆる他の物、並びに勞働によつて生産せらるゝも、市場に於いて何等かの價格を收得するに足る一般的评价を受くることなき底の總べての物を排除するが爲めに附加せられたのである。然しながら、這般の定義が説明せらるゝに及んでは、多數の人々は「人間の便益若しくは享樂に資する總べての物」を、惟り總べての物質的なる物のみを含意するものと解釋するの傾きがあつた。非物質的生産物を彼れ等は富と看做すことを拒否し、而して非物質的生産物の外、何物をも産出することのない勞働若しくは經費を、彼れ等は不生産的勞働及び不生産的經費として銘記した」と説き、(Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, 1844, pp. 76-77.) 而して彼れ自身は、一國の富を以つて、物質的たると非物質的たるとを問はず、其の中に含有せらる

享樂の永續的泉源の總高より成り、而して是れ等の永續的泉源を増大し若しくは維持するに資する勞働若しくは經費を生産的と名附く可きものと解した。(Ibid., p. 82.)

然るにミルは此の著中の第五論文「經濟學の定義及び之れに適當なる研究の方法に就いて」に於いては、富なる名辭は浮動しつゝある蒸發氣多き、聯想の霧に包まれて居り、是れ等のものは之れを通じて見らるゝ一切の物が明瞭に現さるゝことを許さざる可きであると做し、冗長の語を以つて之れに代ふるならば、富は勞働なくして無限なる分量に於いて取得せられ得る底のものを除き、人類に對して有用若しくは快適なる總べての物件なりと定義せられると述べた。而して彼れは、或る權威ある學者は、總べての物件と云はずして、總べての物質的物件と稱するも、這般の區別は現在の目的の爲めには何等重要ならざるものであると附言した。(Ibid., p. 126.)

而して彼れは是れよりして四年の後に出版せられたる其の「原論」に於いては「總べての人は富によつて意味せらるゝ所のものに關し、普通の目的に取つては、十分に正確なる總念を有する」と做し、而して「一の名辭によつて提示せらるゝ觀念が既に實際的目的の要求するが如き確定性を有する所に、定義の形而上學的精緻を企圖するは毫も此の著の企圖の一部たるものではないと述べてゐる。而も彼れは如何なるものが富と看做さる可きであるかと云ふ問題の如き極めて單純なる主題に關して何等有害なる觀念の混亂が生じ得可しとは殆んど全く豫期せられ得ざる所であるが、斯くの如き觀念の混亂が存して居つたこと——理論家及び實際政治家が等しく、又、一時期に於いては普く、是れに由つて感染せしめられて居つたこと、而して多くの世代の間、それは歐洲の政策に對して徹頭徹尾誤れる

方向を與へたことは歴史上の事實であると説いてゐる。(Principles, op. cit., p. 2.)

而して、彼れは先づ、惟り貨幣のみならず、苟も人間の目的に役立つ、而して自然が無償を以つて支給することのない他のあらゆる物も亦、富なりと做した。富裕であることは、有用なる物品若しくは是れ等のものを購入する手段の大なる蓄へを有することである。斯くて、購買力を有し、有用若しくは快適なる或る一定の物が之れと交換に與へらる可きあらゆる物は富の一部を形成する。之れと交換して何物も取得せらるゝこと能はざる諸物は、是れ等のものが如何に有用若しくは必要なるにせよ、此の名辭が經濟學上に於いて使用せらるゝ意味に於いての富ではない。(Ibid., p. 8.)。斯くて彼れは個人の所有物、及び一國民又は人類の其れに適用せらるゝ際に於ける、富なる語の意味に於ける重要な差別に到達する。人類の富の中には、自から效用又は快樂の一定目的に役立つことのない物は包含せらるゝことがない。個人に取つては、其れ自體に於いては無用であつても、苟も彼れをして他の人々から彼れ等の有用若しくは快適なる諸物の蓄への一部を要求するを得せしむる物は富である。(Ibid., p. 9.)。而して彼れに従へば、富は交換價值を有する總べての有用又は快適なる諸物、若しくは、換言すれば、勞働若しくは犠牲なくして、願望せらるゝ數量に於いて取得せられ得るものを除き、總べての有用又は快適なる諸物と定義せらるゝを得可きである。此の定義に對する唯一の反對論は、そが是れ迄多く討議せられて來た問題——非物質的生産物と稱せらるゝものは富と看做さる可きであるか如何か、例へば、職人の熟練又は身心のあらゆる他の先天的若しくは後天的なる力は富と稱せらる可きであるか、如何かを不確定の中に残すの一事たるが如くである。而も、ミルは斯くの如

き問題を以つて甚しく大なる重要性を有せざるものと観、茲に之れを討究することを避け、其の論攻を要する限りに於いては、他所に於いて考察せらるゝを以つて更らに便宜なる可しと做し、之れを第一編第三章に委譲した。(ibid., pp. 10-11.)

富に就いての最初の研究は其の原因に關するものである。ミルは『原論』第一編「生産」論に於いて、「生産の諸要件」即ち自然的動因、労働及び資本、「生産動因の生産性の程度」及び労働、資本及び「土地よりの生産」増加の法則の三主要題目を論述する。生産の要件は労働及び適當なる自然物の二つである。(ibid., p. 29.)。自然は嘗だに物質のみならず、力をも亦供給する。(ibid., p. 30.)。吾人にして自然に對する人間の行爲と稱せらるゝ所のものゝあらゆる場合を検討するならば、吾人は、一度び物件が正しい地位に入らしめられた際には、自然の力、若しくは他の言葉を以つてすれば、物質の特性が總べての仕事爲すことを看出す可きである。諸物を其れ自身の内部的諸力により、又他の自然物中に屬性として存しつゝある諸力によつて作用せらるゝに適當なる場所に入らしむる這般の一作業は人間が物質を取扱ひ、若しくは取扱ふことを得る總べてである。彼れは單に或る物を他の物に向つて、若しくは之れより移動するに過ぎない。(ibid., p. 32.)。自然は製造業に於けるよりも、農業に在つて、人間の盡力に對してより、多くの援助を借すものと做すの狂想はミルによつて排斥せられた。佛國經濟學者(重農學派)によつて主張せられ、而してアダム・スミスが是れよりして免るゝことになかつた這般の概念は地代の本質を誤解せるより生じたものである。土地の地代は自然的動作力に對して支拂はるゝ價格であり、而して何等斯くの如き價格は製造業

に於いて支拂はるゝことなきが故に、是れ等の著者は、價格が支拂はるゝ以上は、そは支拂はる可き更らに大なる勤務の高的存するが故であると想像したのである。而も、土地の使用が價格を生ずる理由は單に其の分量の限定せられたることであり、空氣、熱、電氣、化學的動作力及び其の他製造業者によつて使用せらるゝ自然の諸力が供給せらるゝこと乏しく、而して土地の如く、獨占せられ、專有せらるゝを得たならば、地代は是れ等のものに對しても亦、取立てらるゝを得可きである。(ibid., p. 34.)

而してミルは前述の如く、此の著の第一編第三章に於いて「不生産的労働に就いて」論じ、富の意義に立ち歸つて、其の中には單に物質的生産物のみを包含す可きか、若しくは又、一切の有用なる生産物を包含す可きかを問題としたのである。彼れはセイに従つて、吾人が生産し、若しくは生産せんと願望する所のものは常に效用なりと做し、労働は物件を創造するものに非ずして、效用を創造するものと觀た。(ibid., p. 56.)。而して彼れは労働によつて生産せらるゝ效用を三種に分つ。第一は外界的物件中に固定せられ體現せらるゝ效用、第二は人間中に固定せられ體現せらるゝ效用、而して第三は如何なる物件中にも固定せられ體現せらるゝことなくして、提供せらるゝ單なる勤務より成る效用である。第三種の效用は、長短一定の時間を通じて快感を與へ、不便若しくは苦痛を免れしむるものではあるが、何等かの人若しくは物の改良せられたる性質に於いて永續的取得を残すものではないのである。(ibid., pp. 57-58.)。而して彼れは單に享樂せらるゝ間のみ存在するに過ぎざる快感及び單に遂行せらるゝ間のみ存在するに過ぎざる勤務に存する第三種の效用を以つて承認せられたる隱喩によるの外は、富として云々せら

ることを得ざるものと做してゐる。蓄積し得ることが富の觀念に取つて缺く可らざるものである。生産せられて後、使用せらるゝ前、暫くの間保存せらるゝことを得ざる諸物は斷じて富と看做さる可きものではないとミルは思惟する。蓋し是れ等のものゝ如何に多くが生産せられ享有せられ得可しとしても、是れ等のものによつて利せらるゝ人は、毫も富裕の度を増すことなく、聊かと雖も境遇に於いて改善せらるゝことなきが故である。一國の工匠の熟練と精力及び堅忍とは、彼れ等の道具及び機械に比して何等劣ることなき其の富の構成部分であると認められる。這般の定義に従へば、吾人は人間中に體現せらるゝと、又如何なる他の有生若しくは無生の物件中に體現せらるゝとを問はず、永續的效用を生ぜしむるが爲めに使用せらるゝ總べての勞働を以つて生産的と看做さなければならぬ。而して彼れは前述の如く其の舊著『經濟學の未決定問題』の第三論文に於いては、嚴密に國語の慣用法とは一致することがないが、而も最も分類の目的に適合するものとして這般の名稱を使用した。然しながら、富なる名辭を人間の産業的能力に適用する際には、普通一般の觀念に於いては、暗に物質的生産物に關するものと解せらるゝの常なるが如くに見える。工匠の熟練は物質的意味に於ける富を取得するの手段たるが故にのみ、富と考へらるゝのであつて、判然這般の目的に資することのない如何なる性質も殆んど全く斯くの如く看做さるゝことがないのである。一國はそが其の住民の天才、美德若しくは技藝に於いて如何に貴重なる所有を有し得可しとしても、實に、是れ等のものが販賣せらる可き物品と看做され、是れに由つて其の國が、古代の希臘人及び種々なる近代國民の行へるが如くに、他の國々の物質的富を誘致し得るに非ざれば、隱喻によるの外は、富裕の程度に於いて大であるとは殆んど稱することを得ないであらう。是に於いて乎、彼れが新學語を構成するとしたならば、此の區別を生産物の物質性よりも寧ろ持続性に依らしむ可きことを可とするのであるが、而も一般に慣用せられつゝある名辭を使用する際には、能ふ限り慣例に違犯せざるように之れを使用することが望ましい觀があると思はれる。斯くて、ミルは其の著に於いて富を云々する際には、是れに由つて單に物質的と稱せらるゝ所のものゝみを、又、生産的勞働なる文字に由つては、單に物質的物件中に體現せらるゝ效用を生産する努力の種類のみを了解せんとしたのである。(Ibid., pp. 59-60.)

七

斯くの如く、ミルの『原論』に現れた富の概念は甚しく狹隘なるものであつて、明かに經濟的研究の適當なる主題たるものゝ多くを除外しなければならなかつた。斯くて彼れは勞働を以つて生産的及び不生産的と做す有害なる分類を復活し、而して特に生産的勞働者の表から、俳優、奏樂家、公衆に對する朗讀者若しくは誦讀者及び見世物師、並びに「陸海軍人、立法者、裁判官及び司法官吏」の如き人々を除外しなければならなかつた。他方に於いて、バスターアの指導の下に立てる一定の經濟學者等は傳統的分類より結果しつゝある弊害に動かれて、富なる概念を彼れ等の學問の主題たらしめざること以外に何等の救濟策なきものと觀たのである。(John B. Clark, The Philosophy of Wealth, Economic Principles newly formulated, 1894, pp. 2-3.) バスターアは、生産の直接目的が人間其の者に存すると物件に存するとに依つて「勤務の生産」と「富の生産」とを分つて、非物質的富を高調せるデュー

アイエの後を承けて、市場に於いて交換せらるゝものは惟り勤務のみであると観たのである。(昭和四年版拙著「經濟史」二九一—三〇〇頁参照)。

ミルは經濟學の二大部門を以つて、富の生産及び其の分配と做した。而して彼れは「生産」の諸條件及び諸法則を以つて、社會の體制が「交換」に依存することなく、又之れを容るゝことがなかつたとしても、其の現在に於いて存する所と同一なる可きものであると思惟した。業務が細分せられ、而して生産に携はる總べての者は其の報酬を一特殊貨物の價格に依頼する現存産業生活の組織に於いてすら、交換が収益分配の根本法則に非ざることは、恰も道路及び乗物が移動の至要法則に非ずして、單に之れを遂行するが爲めの機關の一部に過ぎざるが如くである。(Principles, op. cit., pp. 513-514.)

然るにパスチアに従へば、交換は經濟學であり、それは社會全體である。(Harmonies Economiques, 9e ed., — *Oeuvres complètes de Frédéric Bastiat*, VI, 1884, p. 91.)。吾人が親しく自ら他人の苦痛及び快感を経験し得たに非ざれば、吾人は互ひの爲めに苦み若しくは樂むことを得ない。而も、吾人は相互に援助し、互ひの爲めに勞作し、相互的勤務を致し、又、報酬を受けて吾人の能力若しくは其の行使の結果を他人の意に任せることが出来る。これが社會である。是れ等交換の原因、結果、法則は政治的及び社會的經濟の主題を構成する。(Ibid., p. 94-95.)。貨物は轉々讓渡せられる、而も是れ等のものは物質化せられた勤務であつて、他のものは依然物質的體現なくして殘存する。富は現實的 (effective) なるか若しくは相對的 (relative) なるかの孰れかである。第一の見地に於いて

は、吾人は吾人の満足によつて之れを判斷する。人類は其の取得する安易若しくは物質上繁榮の總量が愈々大なるに比例して、其の取得する物件の價值が如何にあるとも、愈々富裕と爲る。然しながら、吾人は、各人が一般的繁榮に對して有する比例的分配如何、換言すれば、其の相對的富如何を知ることを要する。これは單に價值のみ惟り示顯する關係である。蓋し價值は其れ自體一の關係なるが故である。經濟學は人間の一般的福利及び繁榮並びに彼れ等の「努力」と彼れ等の満足との間に存する割合、生産の事業に於ける無償なる效用の累進的參加が有利に改變する割合を取扱はなければならぬ。是に於いて乎、吾人は這般の要素を「富」の觀念から排除することを得ない。科學的見地に於いては、現實的富は價值の總額ではなくして、是れ等の價值に附隨せる無償なる效用及び負擔を伴へる效用の全部である。満足に關しては、即ち富の現實的結果に關しては、吾人は猶ほ存續する價值によると等しく、進歩によつて滅絶せしめられたる價值によつても亦、富裕ならしめらるゝのである。(Ibid., p. 208.)

彼れは尙ほ語を續けて言ふ、生活上の日常事務に於いては、吾人は效用が價值の低下に由つて無償的と爲るに従つて、之れを顧慮することなきに至るのである。何故かなれば、蓋し、無償なるものは共同であり、共同なるものは毫も各人の現實的富の分前を變ずることなきが故である。吾人は萬人に共同なるものを交換することがない、而して吾人が日々取引に於いては、吾人は單に價值が設定する割合を熟知せしめらるゝを要するが故に、吾人は他の如何なるものをも顧みることがない。這般の主題はリカードとジェ・ベー・セイとの間の論争を喚起した。リカードは「富」なる語に「效用」の意味を與へ、セイは「價值」の其れを與へた。パスチアは是れ等闘士の一方が

勝利を獨占することは不可能であつたと説く。蓋し此の語は、富が現實的と看做さるゝか若しくは相對的と看做さるゝかに従つて、兩意義を容るゝが故である。然しながら、彼れは、吾人が「富」(現實的福利の意味に於ける)を「價值」と混同するならば、殊に前者が後者に比例することを肯定するならば、吾人は斯學に過れる方向を與ふるの虞れあることを注意するの要ありと做してゐる。第二流經濟學者の著作及び社會主義者の其れは遺憾ながら之れを實證して餘りあるものである。人間種族の最も公明正大なる相傳の財産を形成する所のものをきつぱりと觀察の外に隠蔽して出發するは不幸なる發端である。そは吾人を誘つて、進歩が萬人に共同ならしめたる富の部分を減絶せるものと考察せしめ、又、匿證伴争(*Deception de principes*)に陥り、而して經濟學を逆に研究し、其の達成が吾人の對象たる目的を絶えず吾人の努力を妨害する障礙と混同するの危険に吾人を曝すものである。(ibid., p. 208-209)。

パスチアを以つて觀れば、洵に、障礙の存在に對するに非ざれば、吾人の生來の弱點の徵證たる「價值」の如きものは存することを得ないのである。吾人が一國內に存在しつゝある價值の總高が愈々大なるを看出せば、吾人は障礙の克服せられたる愈々大なる證跡を有するのであるが、而も吾人は又、克服す可き障礙の存する愈々大なる證跡を有するのである。吾人は是れ等の障礙より離れては「價值」は何等の存在をも有せざる可きが故に、這般の障礙は「富」を構成するとまで稱す可きであるか。吾人は二個の國家を想像することが出来る。其の一は自然に恵まれ、打ち勝つ可き障礙を有することより、少なきが故に、そはより、少なき「價值」の高を以つて他の國よりもより大なる範圍まで享樂の手段を有する。孰れがより、富裕であるか。若しくは同一人民の歴史上の二時期を想像し、打ち勝た

る可き障礙は兩時期に於いて同一であるが、而も現時に於いては著しく容易に是れ等の障礙を克服するとする。斯くの如き事情の下に在つて、吾人は正當に其の社會の「富」は價值のより、少なる高を有するが故に、そは退歩せりと稱するを得可きであるか。而も、吾人にして若し「富」と「價值」の二物を混同するならば、吾人は斯くの如き結果に赴く可きである。(ibid., p. 209-210)。

パスチア曰く、經濟學は茲に實感せらるゝ「満足」によつて富を測定す可きであるか、若しくは創造せらるゝ「價值」による可きであるかの孰れかを選ばざるを得ざる地位に立つものであると。(ibid., p. 210)。彼れは「富」を以つて「價值」として定義するの理論は「障礙」の讚美に過ぎざるものであると斷言する。其の論法は次ぎの如くである。「富は價值に比例し、價值は努力に比例し、努力は障礙に比例する、是に於いて乎、富は障礙に比例する」。(ibid., p. 211)。パスチアに在つては、社會の進歩に連れて、負擔を伴ふものであり、價值を有するものではなくなるが、而も是れが爲めに效用を喪失することなくして、將さに共同、無償の領域に歸せんとしつゝある效用の部分は正さに爲政家及び經濟學者の不斷の注意を惹く可きものである。然らざれば、斯學は人類に影響し、而して之れを高揚する偉大なる結果を洞察し、理解することなくして、全然偶發的、可變的なるもの、縦令ひ、消滅することなきも、減少するの傾向を有するもの、單に一の關係に過ぎざるもの、一言にして盡せば、「價值」を取扱ふに委せらる可きである。之れに氣附くことなくして、經濟學者は單に苦痛、障礙、生産者の利益のみを考察するに至り、更らに又、彼れ等は生産者の利益を以つて公共の利益と混同し、換言すれば、惡を以つて善と誤り、而してシスモンディ及び

サン・シヤマンの輩に導かれて、遂に社會主義者の理想境若しくはブルードンの矛盾に到着するに至るのである。(ibid., p. 221.)

八

夙にローダゲールは、言葉の誤れる使用法によつて世界に流布せしめられたる錯誤と曖昧、誤謬と混亂とを強調し、而して經濟學の如く這般の錯誤に累せらるゝの虞れ大なるものは存することなしと觀て居つた。(『三田學會雜誌』第三十一卷第四號所載拙稿『第十九世紀英國反統派經濟學』五一六頁參照)。而してミルの直前に於いて、シイニオア、ホウエートリ及び其の他の經濟學者等は、最大なる困難と最大なる注意の必要とを看出すは斯學の根本概念の構成に於いてあることを指摘しつゝあつたに拘らず、既述の如く、ミルは極めて無造作に、總べての人は富の意味する所のものに關し、普通の目的に取つては、十分に正確なる總念を有すると做し、而して一の名辭によつて提示せらるゝ觀念が既に實際的目的の要求するが如き確實性を有する所に、定義の形而上學的精緻を企圖するは毫も其の著(『原論』)の企圖の一部を構成するものではないと稱した。而も彼れ自身、以上の章句の後に於いて直ちに其の筆を進めて、重商主義を例證として、富の本質及び用途に關する誤れる見解が幾多の世代の間、歐洲の商業政策に誤れる方向を與へたることを明かにしてゐる。果して然らば、マクラウドの言ふが如く、「富」なる語の意味は無益なる言葉争ひ、若しくは物好きな思辨の對象たるものではなくして、そは一大科學の基礎たるのみならず、種々なる時代に於いて之れに與へられたる意味の如く、世界の歴史と諸國民の福利に影響すること深甚なり

し語は存することがないのである。セイの如き第十九世紀初頭の經濟學者は、彼れの時代に先き立てる二世紀中、五十年は此の語に與へられたる意味よりして直接に起れる戰役によつて費されたと觀た。然るに此の世紀の進みに於いて、經濟學者は此の語の意味によつて國際的戰役が再び又惹起せらる可しと做す危惧の念を減少すると共に、彼れ等は更らに一層戰慄す可き危険によつて脅されたのである。即ち社會主義の「恐しい妖怪」は、之れを奉ずる者自らの言ふが如く、アダム・スミス及びリカードによつて表明せられた「富」の理論を基礎として現れたものと解せられたが爲めである。(Henry Dunning Macleod, The History of Economics, 1896, pp. 670-671.) 斯くして到る處に勢力を逞しうしつゝある新學說に對して同情的の態度を以つて耳を傾けんとしつゝあるジョン・スチュアート・ミルの『原論』出版の後、幾許ならずしてバスターは社會主義理論の根柢を成せる總べての富は土地及び勞働の産物であり、勞働は總べての價値の原因なりと做すアダム・スミス及びリカード經濟學の有害なる謬見を根絶せんと企圖したのである。而も、常にブルヂェワ經濟學の權化と看做され、現存經濟制度の擁護者と思惟せられたるバスターの如上の企圖が果して那邊まで科學的に成功せるやは固より疑問である。

然しながら、「勤務」の名辭を使用して價値を説明せんとせるバスターの企圖がたわいのないものと看做されなければならぬにしても、吾人は臆がて快樂主義派及び數學派の語彙中に再び此の語に逢着するに至ることを注意しなければならぬ。是れ等の諸學派は限界效用法則を別箇の方法を以つて叙述するに過ぎざるものとして屢々「勤務價値の法則」を云々するのである。

ジェヴォンズ曰く、「ミルは彼れの『原論』の第八頁に於いて、明晰なる定義たるの観あるものを提唱した。『富裕であることは、有用なる物品若しくは是れ等のものを購入する手段の大なる蓄へを有することである。斯くて購買力を有し、有用若しくは快適なる或る一定の物が之れと交換に與へらる可きあらゆる物は富の一部を形成する』。洵に葛藤は彼れが直ちに之れに次いで『之れと交換して何物も取得せらるゝこと能はざる諸物は、是れ等のものが如何に有用若しくは必要なるにせよ、此の名辭が經濟學上に於いて使用せらるゝ意味に於いての富ではないことを注意せる章句其の者に發する』と。『是れ等の二三の章句中に多くの形而上學的精緻は存することがない。而も其の下に横はる難件はミルが知ることのなかつた效用の理論なくしては解決せらるゝこと能はざるものであつた』と。(The Principles of Economics. A Fragment of a Treatise on the Industrial Mechanism of Society and other Papers, by the late W. Stanley Jevons, 1905, p. 15.)。諸物は最早「有用若しくは快適」と稱せられずして、「效用」を有すると説かるゝに至つた。而してジェヴォンズによつて最後效用と全部效用との間に差別を設けらるゝに至つた時、葛藤は漸くにして解決の緒に着いた。而して又、恰もバスターが其の「勤務價値の理論」(La théorie de la valeur-service)によつて當時の社會主義的理論に對抗せんとしたと等しく、ジェヴォンズの流を汲めるウィックスチードが其の限界效用理論を適用してマルクスの餘剩價値學説を批評し、ピローム・バヴァーク及びバレットオに先鞭を著けたことは吾人が他の機會に於いて述べたるが如くである。(『三田學會雜誌』第三十一卷第四號所載「フィリップ・ヘンリー・ウィックスチードの『經濟學の常識』」二四一―六頁参照)。

ミルは「富」を交換價値を有するものゝみに限定した。斯くの如く交換價値を以つて富の必要條件たらしむるはマカラックの所論と一致するものである。而も這般の限定は實に富を價値に還元するものであつて、何故に普通の用語並びにリカードオ經濟學者の用語すら、是れ等の兩者を區別したかを了解するを困難ならむると做すの非難を受け得可きものである。洵にリカードオは其の『原理』中に於ける「價値と富」の區別に於いて限界效用と全部效用との區別に赴く可き彼れの道を意識せるの觀があつた。(昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷三五〇頁参照)。ミルは經濟學を以つてハウエトリの如く「交易學」と看做し、又は他の經濟學者等の如く「價値の科學」と呼ぶことがなかつた。彼れは其の著の第一編及び第二編に於いても、特に勞働及び土地の價値に關するが如く、價値の理論の一定小部分を豫示するの必要を免れなかつたのであるが、而も彼れは價値の根本法則を第三編に至るまで論述するところがなかつた。蓋し彼れは經濟學の二大部門たる富の生産及び分配の中、價値の考察は惟り分配が競争によつて行はれ、恒例若しくは慣習に由らざる限りに於いてのみ、單に之れのみと關係するものと觀たが爲めである。(Principles, op. cit., pp. 513-514.)。而して彼れが生産の諸條件及び諸法則を以つて、社會の體制が交換に依存することなしとしても、現在と異なることなしと想像せるは既述の如くである。然らば「富」を以つて經濟學の對象と做し、之れを其の著の「序説」に於いて論じたる彼れが、交換價値を以つて其の必要條件と做し、富を以つて有交換價値物件の總高たらしむるの定義を採用したるは矛盾と云はなければならぬ。然も、彼れは使用價値若しくは購入者の評價に於ける或る物の效用が交換價値の極限であることを認めた。(Ibid., pp. 515-516, 522-523.)。而して主

観的なる限界的使用價値の客觀的表現として交換價値を觀るに至つた時、理論經濟學は新生面を打開するに至つた。茲に、ミルが經濟學の一部門として承認することのなかつた「消費」論の研究は、少くとも經濟學の全範圍を明瞭ならしむる一の法別、即ち限界效用の法則を吾人に紹介するものと爲つた。是に至つて總べての純理經濟學は最早交換上に於ける自由競争の推定に依存するものと想像すること不可能と爲る。經濟學はアレクザンダー・セルクレイグの孤島に於いても、ハイモニーの共產團體に在つても或る範圍まで其の適用を看出さる可きものと爲る。

ドイツ技術哲學史

—F. Zschimmer, Deutsche Philosophen der Technik, 1937.—

藤 林 敬 三

技術の哲學的研究は、從來殆んど専ら、ドイツに於いて開拓せられて來てゐる。そしてそれは既に相當の年數を経て居り、且つ稍々多數の文献がこの方面に存して居り、従つて吾々に取つては今日、技術哲學史に關する一つの獨立の著作が期待されていゝ筈である。しかもかくの如き期待は從來充分滿されることがなかつた。(註一)私が此處に紹介しやうとするツシンマーの著作は「ドイツ技術哲學者」と題されてゐるが、それは右の吾々の期待を滿す技術哲學史に屬する一文献である。(註二)

(註一) 但し技術哲學に關する從來の著作中には、過去の文献の學示と同時に、その批判的考慮を含むものゝ存したことは事實である。

(註二) 著者ツシンマーは現在カルルスルーヘ工科大学に於けるSilikattechnikの教授であるが、技術哲學に對しては相當以前から注意を拂つて居り、その著「技術の哲學」(T. Auf, 1914, 3. völlig umgearbeitete Auf, 1933)はこの方面に於ける一つの重要文献である。